OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	考え、悩み、つながる瞬間 ： 吹田第三幼稚園での対話の試みから
Author(s)	山本, 聖人
Citation	臨床哲学のメチエ. 2012, 18, p. 32-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23020
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

考え、悩み、つながる瞬間
―吹田第三幼稚園での対話の試みから―

山本聖人

一昨年の秋から続けている、幼稚園でのボランティア実習。教職の単位合わせのつもりが、すっかり子供たちの虜になってしまった私は、3月のある日、園長先生のご厚意ですばらしい時間を持つことができました。幼稚園での哲学対話。今までも高校生や小学生とそうした時間を持ったことはありましたが、今回の相手は5歳児。どんな言葉が出てくるだろう、という期待と、全く話ができなかったらどうしよう、という不安の中で始まった試みでした。

先生が「今日はきりんさん（年長組のこと）の皆に、あることをしてもらいます。こういうこと、したことないんじゃないかな」という言葉で、子供たちは一斉にわくわくし始めます。先生が子供たちと円をつくり、僕もその輪の中に入れてもらいます。コミュニティボールは背中の後ろに隠していたのですが、既に子供たちからは「あれ何？」といった声が聞こえます。

「今日はね、きよひとくんとゆっくり話してみようと思います。ずっと一緒に遊んでもらってきたけど、こうやって皆で一緒に話すことってなかったでしょ？じゃあ、きよひとくんよろしく！」

…ポカーンとしている子供たち。視線がこちらに移ります。

「今日は火曜日だけど、皆と一緒にお話がしたくて来てしまいました。せっかくだから、こんなの持ってきました！」

色鮮やかな毛糸玉を見た子供たちは、にわかに騒ぎ出します。

「なにそれー！」

「毛糸やー！」

「変なの！」

「ちょうだい！」

「これはね、使う時に2つルールがあります。ひとつは、これを持っている人が話します。そして、持っている人の話を聞きましょう。大丈夫かい？…じゃあこれ使って…そうやな、好きな食べ物言っていこうか！言いたい人！」

皆、コミュニティボールを食い入るように見つめています。しばらくして、何人かのやんちゃな子供たちが、手を挙げます。それにつられて、徐々に他の子供たちも手を挙げるようになります。

「牛乳！」

「カレー！」

「麻婆豆腐！」

麻婆豆腐を知っているのか、というツッコミはさておき、10人くらいに回ってから、ルールが浸透したのを確認して、本題に入ります。今日のテーマは、ボールを使って、ボールについて話すこと。このコミュニティボールという正体不明なものを、5歳児はどう捉えるのだろう。緊張、どきどき、わくわくの瞬間です。

「使い方わかったかな？じゃあ、ちょっと皆考えてほしいんやけど、これに名前つけたいと思うんだ。どんな名前が良いだろう？」

再びポカーンとする子供たち。しまった。問いかけが急すぎた。

「これみてどう思う？色とか、形とか、思ったこと何でも良いから教えてほしいな。」

先ほどのやんちゃ集団の一人が、手を挙げます。

「えっとな、あんな、んと、…あんな、えっとな、…ふわふわ。」

「どの辺がふわふわ？」

「あんな、えっとな、この辺。」

「色はどう？」

「きれい！」

「どの色がきれい？」

こんなやり取りが何人かと続いて、少しずつ名前も出てきます。

「ふわふわボール！」

「マイクボール！」

「虹色だからレインボーボール！」

どの辺が？どうして？一つ一つに少しずつ突っ込んでみる。細かく話してくれる子もいれば、わからなくてただ考えこんでいる子もいる。もっとこの子が考えていることを知りたい、そう思っても言葉が出てこない。思考を広げられるような質問ができない。これめちゃくちゃ難しい。一人一人の発言に、いちいち考えこんでしまう。ああ、しーんとなってしまった。何か返さないと。余裕が、なくなる。

そうした焦りは、子供たちに伝わっていきます。こちらが揺らぐと、子供たちも揺らぐ。急に下を向いて話を聞かなくなる子や、寝転がる子が出てきます。

そんな中、先生が助け船を出してくださいます。今までの話を軽く引き合いに出しながら、まだ話していない子供たちにボールを投げかけます。先生の言葉って不思議です。一人と話しているのに、なぜか言葉はその場の皆に向かって発されているみたいで、皆が聞き入ります。再び廻りだす場の空気。

話は続きましたが、名前は決まらなかったので、次に来たときにまた教えてもらうことにして、とりあえず話し合いは終了。最後に先生が「今日きよひとくんとお話してどうだった？」と問いかけてくださいました。

「ボールの名前考えれて良かった！」

「ボールが楽しかった！」

「きよひとくんとお話できて良かった！」

「僕と話せて〜」という感想と、ボール自体の感想は半々といったところでした。

若干空気を読んでくれた気がしないでもないのですが、楽しんでもらえたようで良かった。最後に本間さんの提案で、持っていったボールをクラスに置いていくことにして、時間は終わりました。

ボールを持っている子供たちは、必ずしもよくしゃべったわけではなく、ボールを持って黙りこむ子供もいました。しかしその沈黙の時間は、その子がボールを見て思ったことを、必死に言葉にしようとして、できなくてまた考えて、という非常に濃い時間であるように感じました。卒園前にその姿が見られただけでも、僕は嬉しい。

その後の自由時間、何人かの子供たちがコミュニティボールで遊んでいました。何でもいいから言葉を話して投げる、というルールのもとで遊んでいたのですが、子供たちが非常に面白い変化を見せた、と先生が教えて下さいました。最初はただ興奮して叫びながら投げていただけなのが、15分くらいすると会話になり始めたそうです。

「プリン食べたいー！」

「高いからだめー！」

というように。

「言葉を発して投げる」という、一見縛りのきついルールを自ら受け入れ、それを用いて人と関わるということ、それが会話になったこと、しかもそれを彼らは面白いものとして捉えました。決して言葉を重ねて、話を深めたわけではない。それは探究としては不要なつながりかもしれないし、彼らの人間関係にとってどんな意味を持つのかもわからない。でも、彼らはその瞬間、確かにつながりました。言葉を介さないやり取りが言葉のやり取りにつながり、場が変容していく、その瞬間に子供たちの間で何が起こったのか。残り半分となった大学生活で、またひとつ考えたいことが増えてしまいました。来年度に子供たちからどんな言葉が発されるか、今から楽しみです。

最後に。

ボールの名前は「レインボーマイク」になったそうです。

（やまもと　きよひと）